昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十九年三月十五日発行毎月一回・十五日発行
（通第一七九号）

慈光

第十六巻　第三号

目次

「教行信証」欲生釈……近角常観……（1）
一道会の記……榊原徳草……（8）
畏れを除く……北条恵実……（16）
聞信断片……花田正夫……（23）

「教行信証」三心釈

欲生釈（如来廻向）（一）

近角常観

第拾席

次に欲生と言うは、則ち是れ、如来諸有の群生を招喚し玉うの勅命なり。即ち真実の信楽を以て、欲生の体とする也。誠に是れ大小凡聖定散自力の廻向に非ず、故に不廻向と名くる也。

然るに微塵界の有情、煩悩海に流転し、生死海に漂没して、真実の廻向心無し、清浄の廻向心無し。

是の故に如来一切苦悩の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じ玉いし時、三業の所修乃至一念一刹那も、廻向心を首となして、大悲心を成就することを得たまえるが故に、利他真実の欲生心を以て、諸有海に廻施したまえり。

欲生は即ち是れ廻向心なり。斯れ則ち大悲心なるが故に疑蓋雑じわること無し。

前席に於いて大分細かな話をしたのでありますが、要するに信心の真の味いを申し述べたいと思うたからであります。で要する所、他力信仰に於いては、仏の遣る瀬なきお心を一念知らせて頂いた時、やれ有難やと信心歓喜の思いが起る。その遣る瀬なきお心とは、我々善いにつけ、悪しきにつけ種々無量の計らいを起し悩んで居る者を、其者を哀れと思召し、救わんと誓い給いし大悲真実の御意であります。で、他力に於いてはこの広大の御意を頂く外に、何物も無い。今皆さんがこの講義をお聞き下さるにしても、講本に書いてある意味合いを知らるることが肝腎にあらず。この講義を縁として、この広大なるお慈悲一つを頂いて下されば、最早申すことは無いのであります。

さて親鸞聖人が、仏の広大なる至心・信楽・欲生の三心の味いにつき、お示し下された趣きは、これまで繰り返し〳〵お話したのでありますが、今席も又この三心の筋合いから申そうと思います。

既に再々お話した如く、至心の仏の真実は何かというに我々日常生活に於いて、人にも真実が無ければ、自分にもまことにする事が出来ない。而してそのために我も人も、

日夜言いて見よう無く苦んでいる有様を、不可思議兆載永劫の間、広大なる真実を以て、哀れと眺めていて下さる。この仏の真実であります。

してその真実は何かとなるに、既に前にも申した事でありますが、ここに一杯の水がありて、其の水は綺麗に澄み渡つた清浄な水である。而してその清浄の水は、即ちなみなみと湛えて、何時でも溢れんとする水である如く、その仏の清浄実は、即ち我々煩悩闇黒の者を飽くまで見捨てぬとある、溢るる信楽の御慈悲である。而して其の信楽の慈悲は、即ち溢るる泉は、まる〳〵此方に呑まそうという水である如く、全く仏の方より私に差し向け、与えて下さるお慈悲である処が、次の欲生となるのであります。

で今席の欲生釈に於いては、初めに

『次に欲生と言うは、則ち是れ如来諸有の群生を招喚したまう勅命なり。即ち真実の信楽を以て、欲生の体とするなり。』

欲生というは、如来の方より我々諸有の群生に、極楽に生れんと欲えと、先き呼びかけて下さる勅命である。而してそのお意は、私が哀れ捨てられぬとの、遣る瀬なき大悲のお心に外なければ、真実の信楽を以てその体とする、とであります。

そこで斯く至心・信楽・欲生の三つは、別物で無い。今言う清浄なる水は、即ちなみ〳〵と溢るる水であり、溢るる水は即ち、私に呑まそうとある水である如く、吾々五分五分の世の中に、斯く互に隔ての止まぬ、それが可哀想で堪えられぬとあるが、あなたの至心のまことである。而してそのまことは悪しければ悪しき者程捨てられぬという信楽の慈悲、其の慈悲は向う様よりまる〳〵此方に蒙らしめて下さる欲生となるのである。で我々に、此方は何程聞いても頂かれず、喜ばぬ仕ようの無きものであるが、其の者が可哀想であると向う様より与えて下さる、この欲生のお慈悲故、遂に此は頂く外無くなるのである。これが廻向ということなのであります。

で「親鸞聖人の真宗は廻向である」、「向うより下さる教である」というは、こちらより手を出すで無しに、此方は浅間しく迷うて居る者を、仏の方より呼びかけて、その者に向うより広大なお恵みを加えて下さるという、ここの処に、当り前ならぬ、思いがけなき処がある。これなればこそ、我々お慈悲が頂かせて貰えるのであります。

それ故、鸞親聖人、ここの処のお示し方が実にひどいのであります。即ち次には

『誠に是れ大小凡聖、定散自力の廻向に非ず。故に不廻向と名くる也』

ここが甚だ大切であります。

先ず『不廻向と名くるなり』……親鸞聖人の浄土真宗は、不廻向の宗旨である。というは何か。入らぬことを申しますも、廻向、不廻向対なることが『選択集』二行章にあるのであります。それはどうなるかというに、すでに善導大師も

『南無と言うは即ちこれ帰命、亦これ発願廻向の義なり。阿弥陀仏と言うは、即ちこれその行なり。斯の義を以ての故に必ず往生を得。』

と仰せられ、南無阿弥陀仏々々々と称うる念仏には、既に廻向の義が具足してあるのである。故にこの念仏を称うる者は、別に此方より廻向を用いなくてもよい。然るに余行余善に於いては必ず廻向を必要とする。それは余宗にありては

『願わくば斯の功徳を以て、普く一切に施し、同じく菩提心を発して、安楽国に往生せん』

と、己が行ずる処の善根を総て此方より廻向して仏果に向う意であつて、即ち余宗にありては廻向は此方より向うに廻らし向ける意味である。しかるに念仏には斯く初めから廻向の義が具わつてある故、別に廻向を用いることはいらぬ。故に余宗は廻向であるも、念仏は不廻向であると、これが不廻向なる言葉の出たもとなのであります。

処が親鸞聖人になると、不廻向は、念仏に廻向がいるいらぬ位のことで無い。何故不廻向かというに、もともと念仏は、仏より御廻向の法である。仏よりの下されもの・親よりの賜わりものなのである。親より金を貰うて居りながら、其金で親に土産を買うて差し上げますという法は無い。故に念仏はまる〳〵大悲よりの下されものであるが故に、仏よりは廻向、此方よりは不廻向であると、ここにきつぱり南無阿弥陀仏は如来廻向という事になり、こちらより差し向けるので無いとなつたのであります。

そこで、前席、前々席でいう、我々此方よりお慈悲を喜び度い、信心を頂き度いは、これ皆こちらより仏に向うこととなり、此方より廻向の意味となるのであります。処が斯く他力は如来より御廻向の法であつて見れば、我々こちらより五分五分で仏に向う法でない。我々こちらより仏に向い、御信心下さいで五分五分でやるのでは、いつまでやつても駄目となるのであります。

そこで斯く他力のお恵みは、如何なる者と雖も、こちらの自分の力で、どうこうなる法で無い。故に『誠に知んぬ、大小凡聖、定散自力の廻向に非ず』大乗小乗の凡夫もとよ如何なる智者聖者と雖も、又定散……定は冥想により心にりを思いを凝らしいて仏に向うものであり、又散は自力力行によりて仏に向う者である。その如何なる種類の者と雖

も自から行う此方の行でどうこうなる信心に非ず、『故に不廻向と名くるなり』すれば我々信心は此方の方より得たい頂きたいと自分の方より仏に向い得らるるにあらず。

仏の方より「その私を待ち受くる。汝の心中を能く知り抜いて居る。而してその汝のために飽くまで見捨てず、飽くまで善くしてとらせる親である」とある、仏の仰せ一つを、頂くほか無いというがここなのであります。

然るに、その我々の方はどうかというに、次には、

『然るに微塵界の有情、煩悩海に流転し、生死海に漂没して、真実の廻向心なし。清浄の廻向心なし』

我々一切の有情は、煩悩生死の海に沈没して、清浄真実の廻向心、一点もあること無い、とであります。

これは我々五分五分に日暮しをなし、人と互に隔て互に悪心を起す時、自分の方より善くするとよいがとは知れども、自分の方より善くする事は一分一厘でも出来ぬのである。百も二百も承知しながらも、それがどうしても出来ぬのであります。

又信心のことにしても、何うかして仏を信じたい、お慈悲が分るようになりたい〳〵で苦しみながらも、どうしても到れぬのであります。私など実にこのために苦しんだのであります。

それ故「真実の廻向心無し、清浄の廻向心無し」とは、我々人に対して親切心が無い、人に物やる心が無いことじやなど、そのような浅い事に考えて居ては分らぬのである。全体我々が人に対し善くするというは、向うが自分に対し、よくするとするのである。向うが設え如何なる考えで自分に向おうと、自分の方より、飽くまでも善く出来るかというに出来ぬのであります。それ故人間は最後になると、どうしても自分の方よりは善く出来なくなる。

故にしまいには自分の方よりどうしても善く出来ぬ故、この出来ざる自分を、誰か人よりよく仕て貰い度いというようの事になる。私が実にこれであつたのであります。

昨日も或方が言わるるには、「自分は一つ一つ手も足ももがれて、何一つ出来なくなつた。さりながら出来ぬが出来ぬで放つておけぬ。でその出来ざる自分を、その出来ぬ処が実に可哀想である。その善くなれぬ処が哀れであると、向うよりその出来ざる処を了解して、優しくしてくれる人があれば、如何に嬉しかろう」と言われた。

処が「その出来ざる処が可哀想である。悪心の止まぬ汝が哀れである、如何にしてもお慈悲の頂けぬ汝を不便に思う」と、向うより遣る瀬なき思いをもつて、向うて下さるが大悲の親の仰せなのであります。然るに我々、この親の仰せを頂く事をせず、これを人生にばかり求め「誰か向う

より然う言うて呉れるとよいが」、「そうしてくれる人があればよいが」と言うて居る。

信仰問題にしてからが、この仏の仰せを向うに置いて、そのお慈悲が頂けるとよいがと、こちらより仏に向つて居る故頂けぬのであります。

爾るに其の頂けざる仕て見よう無き者に対し、仏の遣る瀬なき御心を聞かせて貰うと、即ち次に

『是の故に、如来一切苦悩の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修乃至一念一刹那も、廻向心を首として、大悲心を成就することを得たまえるが故に、利他真実の欲生心を以て諸有海に廻施したまえり』

その自分の力では一分一厘して見ようなき者である故に、仏はこの苦悩の一切群生海を矜哀して下されて……で我々信を求めるというのが決して善い事をして居るので無い。矢張り苦しみ悩んで居るのである。少しも善いことは無いのであります。

で仏はこの苦悩の群生を哀れみまし〳〵て、菩薩の行を行じ給いし時、身口意の三業の所修、一念一刹那も廻向心を首として、大悲心をば御成就下された。即ち、仏因位の中にまし〳〵て、衆生の有様を御覧下された時「あゝあんなことをして居るが」、「あゝあのようなことを思うて居るが」、「これを早く知らせたい」、「これを早く届けたい」と、一念一刹那も廻向心を首として、あなたの大悲心をば、御成就下されたのである。斯く仏のお慈悲は、見捨てぬ大悲を、さあ遣ろう〳〵の御心より御成就下されたのであるから「利他真実の欲生心を以て、諸有海に廻施したまえり」であります。

さて斯く遣る瀬無き廻向心を以て、仏の方より向うて下さるは何か。こちらが真実の廻向心無き奴であるからである。こちらが真実御信心頂きたいなどいう心の無い奴であるからである。

我々の信心頂きたいは、信心という美わしき玉を欲しいというのである。我々の極楽に生れたいは、真実浄土を欣求するので無く、死後らくな処に行き度いということである。然るに、斯の遁げ廻れる私を、それ程までに助けねばならぬと、広大の廻向心を以つて向つて下さる仏にまします。何人もこの広大の御親切に気がつく時は、我が身の悪しきにあやまり果てて、お慈悲の深きに頭が下らざるを得ぬ。ここでその心が此方に届くとなるのであります。次に

『欲生は即ちこれ廻向心なり。斯れ則ち大悲心なるが故に、疑蓋まじわること無し』

極楽へ生れんと欲えと呼びかけて下さる欲生心は、即ちこれ仏より差し向けて下さる廻向心である。斯れ則ち衆生が可哀想とある遣る瀬なき大悲のお意に外なければ、この

お意は一分一里、疑いや障りの無い大悲のお意に外ならぬのであります。

さて、其処でこの廻向心を能く頂いて頂き度いのであります。昨日も或る方が言われるには……私なども長らく此の気持ちがあつたのであるが、「先日来、度々多くの人の入信の経過や、喜ばるる有様を見るに、煩悶しなければ、どうも信仰には入れぬようである。或は自分なども、弥々死ぬとなつたら、信心に入れようかとの思いがある」と話された。

これは実にもつともで現に私なども煩悶して信仰に入つたのであります。何故煩悶の時、信仰に入り易いかと言いますに、煩悶すると、人生に余地が無くなる為である。煩悶せぬ時は人間は俺はまだよい事が出来る。まだ自分には多小の名誉があると思うて居るのであるけれども、一たび煩悶に陥るとそれが皆なくなつて了う。弥々死ぬとなると、今迄頼みおきつる妻子も財宝も、なんにもならなくなつて仕舞う。其処へその者を見捨てぬとのお慈悲を聞くの故、頂かずに居る場所が無くなるからであります。

然るに平日は、頂こうか捨てようかとの余地があるから頂けぬ。「自分はまだ十年や二十年は、これでやつて行けるだろう」、「何か非常な苦しみに衝きあたつたら、自分も頂けるだろう」と、余地があるから頂けぬのである。

『歎異鈔』の御言葉には

『いずれの行も及び難き身なれば、地獄は一定すみかぞかし。』

煩悶すると、その何れの行も及び難くなつてしまう。其処へ斯る者を御見捨て無き広大のお慈悲なることを聞くもの故、直に頂けるのである。一たび余地が無くなると、人生はすべて駄目になつて了う。だから其処で頂けるのであります。

去りながら、然うならなくては頂けぬと思うのは、大なる間違いなのであります。全体我々が今頂けぬというのは、自分はまだ健康である。苦しんでいない、との余地があるからである。併しその余地なるものが甚だ怪しい。頼むべからざる余地を頼みにしているのである。全体我々が今健康であるという、その健康が、何時死ぬかも知れぬ健康で、矢張り、死に迫つて居ると同じ危うさなのである。

又自分は今煩悶せぬかて、人の煩悶するのを聞けば、矢張り自分も同ように苦しむ可きだけの種は充分持つて居るのである。持ちながら煩悶せずに居るのだから、却つてあぶない、苦しまぬ方が劫つて間違つているのである。然し何程間違いと言われても、現に自分がそうなれぬのだから仕方が無いと言わるる、これも実に尤もであります。

然らばその心の余地が如何にして取れるかと言うと、取ろうと自分に苦しんで取れるので無い。設い如何に呑気にありても、其の呑気が決して確かな人生の当てにすべき事ではない、実に危き爆裂弾を平気で懐中に抱いて居るあぶなさである事を、それを弥々平日の時、何によりて気づかせて貰うかと言いますに、実に今の仏の呼び声、御催促、善知識の言葉の下に

「汝平気で過して居るも、その平気でいる裏に、斯くの如き危ぶなき事があるぞ、其の心の中には斯くの如き、悪しきものが隠れてあるぞ、それに対し、我はこれ程までに涙を流し心配して居る。この仏の心を汝は何と思うか」

との遣る瀬なき大悲の仰せが、此方に迫り〳〵て、遂に此方が頂かずに居れなくなるのである。茲は非常に大切な処なのであります。

爾るに我々は、この仏の遣る瀬なき仰せを頂くことをせず、劫つて煩悶でもしたら信仰に入れようか、一層病気にでもなれば信仰に入れようにと、甚だしきはそれを自ら企てようとする人さえある。仏より御覧下さると、其の煩悶無いと思うて居るのが第一あぶなくて仕ようが無い。むしろその呑気がこの上も無き罪悪なのであります。

未完

近詠

福島政雄

ふと開く教行証の信の巻身にしみて誦す初秋の朝

経持てどただ他のために解説する心淋しき我が身なるかも

長栄寺にて　（蒲原）

愚痴に泣く章提希夫人救ひます御教仰ぐ女人の集ひ

静かなる御堂の宵に釈迦牟尼の女人救済の御をしへを説く

おわび

聚墨生

二月号の近角先生の御講話は三月号の今回のあとになりますので、欲生釈口を、信楽釈として記載いたしました。これは大変な間違いをいたしました。おわび申します二月号を本号の続きにお読み下さいますようにお願い致します。なお誤字も多くあわせておわびを申上げます。

一道会の記（続）

榊原徳草

松本先生のお話を次ぎに伺いました。

池山先生の二十六周年を迎えて皆様の感話を拝聴して有難く思います。

学生時代から京都の地に十年の間、先生のお導きに遭い先生の御晩年は少し離れた所に居りましたが、御往生の時には近くにおりその御葬儀にも出ることができましたし又先生の追憶録「呼子鳥」も編輯させて頂きました。先生については種々思出はありますがその二三を述べたいと思います。現在私は松山の愛媛大学に奉職していますが、大学の仏青も十年となり今年は十周年記念の年であります。学生の希望により合宿を秋の大学祭の一環として行い、昨年もこちらにお邪魔している。昨年は学生六、七名だつたが今年は男女学生十七名、卒業生二、三名、約二十名御厄介になつている。歎異抄に「幸いに有縁の智識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることをえんや」とありますが、私はこの池山先生という有縁の智識にあうことができました、まことに幸いにあい得た有縁の智識であります。

私は青森の真宗寺院の生れで十五歳で父に別れ、その後は悲劇の中に生き灰色の生活に沈んで居りましたが、そのなかで聖人の教えは拝読して知つてはいたが悲劇の支えとはなつていなかつた、これは私の至らぬ所であるが、何か聖人の教えには在る、そこに何かが在るとは思つていました。かくして因縁あつて高等学校を終え京都大学に学ぶ身となり、こゝで花田先生と遭いそのお導きにより、父を亡くしてから十一年の後の秋十月に、浴南の上津屋の善照寺の報恩講の御座で初めて念仏に遭うたのであります。其頃また池山先生に遭うことができ、まことに恵まれた私であります。善巧方便ということを深く感じます。

先程、先生は人に会うことが好きだつたとのお話がありましたが、いつも私は日曜日の午後位にお訪ねしましたが先生は大島つむぎなどの着物をきて出てこられ「まあお上り」といわれる、丁度、親が子を待つているようでありました。それは外に現われないでそうであり、人懐しさが現われていました。

先程信国先生のお話で私も思出すことは、じつと心を

こらしてその人を思い追いかけるという先生のお姿ですが、それは親鸞会の同友林田さん……沖縄で戦死されましたが、その奥さんが亡くなられた時、林田兄の寓居は谷大の運動場の東の方でしたが、柩が火葬場に向うとき、モーニング姿の先生はお宅の前で霊柩車が見える間、そちらを追うて凝つと眼をこらして立ち尽されている姿を思い出します。

「幸いに有縁の智識によらずんば」と歎異抄に唯円房が聖人にあいまつつたこの喜びを感銘深い言葉で誌してありますが、私などもこうして念仏の世界にださせて頂いて人生を歩み、人間の宿業である「さるべき業縁の催す」人間の暮しの中に、業縁のまにまに、親・子・友人・隣人の間で好ましい時ばかりでなく、むしろ悲しいときが多いのですがそういうときに先生の御歌「たのまるゝたゞ念仏のわれにあり、さるべき業はさもあらばあれ」の御声に聞き、業を踏み超えて行く力、業を突きぬけて行く力を与えられるのであります。先生の「たゞ念仏して」の世界は二十余年の今日いよいよ思い新たなものがあります。先生はこの一道会の座におられて私を笑い且つ叱つていらつしやることでありませう。

こゝで東先生が、親鸞会当時のスライド映写をしてくれました。こゝに集つた同人達の青年時代、学生姿の金ボタン服の人々が先生の集囲にみられ、その時とその場所が今のように浮び出て、思わずその時のことが口走られて笑声が起ります。蓮華谷の道や、楽友会館での最後の「ただ念仏してたのもしさ」の御講演の御姿、奈良の女高師の無憂華会講演後、春日の森での写真、蓮華谷のお宅での写真、岡崎親鸞会の巽閣での写真など、念仏に於て生きる験を初めて味つた若者の、親の前に喜々として遊ぶようなかつての我々の姿が、その日その時を再現するのでありました。もう学生時代と一寸もかわらぬ気持や言葉が満ちみちて、現在の名声も地位も年令も皆消えて、たゞ先生と「一つの会」になつてしまう感がしました。

次いで向島先生のお話が、しばしのざわめきを鎮めて続きました。

只今東さんのお蔭で古い写真を見せて頂いて懐かしさでいつぱいでした。その時分に花田先生を中心にして学生親鸞会が生れ、それが池山先生へとつながつてお念仏の法雨に浴したのであり、写真にもあつたように、先生のお宅へ参つて信仰の話を伺つたことです。先生のお徳は我々皆同じに感じている、温かさというかそこには隔て心がない。そのことは「呼子鳥」にも書きましたが、或る時私個人で

お訪ねした、それは昼頃であつたが先生のお宅では御寿司を作つて居られ御馳走になつた。おいとまする際、私の寓居が等寺院の近くにあることを告げると先生は、近道を教えてあげようと仰言つて、衣笠の道を案内して下さつた。恰度一本道になつて難なく行ける所まで先生は送つて下さつてお別れの挨拶をして私はその道を歩いて行つたが、暫く歩いて不図振返つてみたとき先生はまだ帰えられずに此方を凝つと向いたまゝ立つて居られる、また暫く歩き振返えると先生はまだ私を見送つて凝つと立つておられる。私が見えなくなるまで立続けて居られた先生のお姿は今も眼底に生きつゞけている。こういうこと、それは先生の自然の態度が、そうさせる、そうせざるを得ないものからの態度で、誰にもヂカに胸に感じてくるもので、温い先生の生来の御性格と共に念仏の徳が先生にのり移つたとでも申すより外はない念仏の徳の現われと思われる。

私は「呼子鳥」に、先生の歩まれた道を歩こう、と書きましたが、懈怠の生活のみで誠に申訳がない。去年の一道会に参加したのは昨日の感であり今後何年生きるか、長くはない、死が近い、それだのに鈍で驚かない、こういう鈍感懈怠なものが念仏の内に摂められ時折お称名が出て下さる。三河のおその同行が、何ともない迄にお育て下さつたが有難い、と云つたときく、近頃それを思う、悩む苦しむは結局皆我執我慢からであるが、仏法は無我であるといい無我になつて一切解決する、何ともないまで仏智に育てられ、あらゆる問題が問題でなくなるまでに育てられた三河のおその同行であると思う。聖人は無我と仰せられず計らいをすてよ、自力をすてゝ、といわれ、何の計らいもなき身をお示し下される。我執のとれぬ奴がお慈悲で融かされる、お念仏が浸みとおつて下さる。そんなことをおその同行から教えられる此頃であります。

川畑先生はユーモアに満ちた話し振りで始める、浄住寺へ来る道を忘れて徳草さんに手紙で聞いた道をその通り来たがそれが又迷つてしまつて遅れたと、聞いても聞いても歩いても歩いても間違いずめの人生の道を示されたようでありました。お話しは次のようでありました。

私も花田先生から親鸞会で導かれ、それから池山先生に遭わせて頂いた。仲々、遠廻りして、念仏の道に来れなかつたものである。池山先生とは私が医者である関係もあり特別の御因縁を頂いたからである。私ほど先生の身近によびよせられた者は少ないと思つている。特に御病体に触れさせて頂き、いつも先生の傍に呼ばれる御因縁を誰よりも多く頂いたのである。それにも拘らず斯ういう奴で御霊

に対して誠に申訳ない。今日は松本氏の大学の学生が去年よりも多く集つて下さつた。まことに、歎異抄第二章の冒頭にある聖人の御言葉通り「各々十余ケ国の境を越えて」遙々と四国松山から参会された諸君は、これはたゞごとではないと思う。

私は停年を前にして君達と同じような大学の学生を前にしている者であり、学生と能く話すことがあるが、どうも世代が違い話しが通じないことが多々あるようだ。先日も学生にゲーテの話をした。それはゲーテの「人生の最高の幸福とは何か、それは健康である、健康になることである」の語を引いたところが学生曰く、ゲーテは廻りくどいことを言う、最初から、「健康になることだ」というべきである、現在の我々としては、それよりも、経済問題こそ幸福の源泉である、と言う。

私は、池山先生も社会経済の救済問題から実地に人生問題にはいられ遂にお念仏の道に入られたことを承っている。私は学生達に言つた、日本歴史で一番出世頭の金持は太閤秀吉である、朝鮮まで征服した、しかし秀吉が臨終に到つてその辞世の句に曰う。「露と落ち露と消えゆく命かな浪速のことは夢のまた夢」と。然るに親鸞聖人はその御晩年まことに貧窮であられた、終焉の御枕頭にも数人の人々しかいない、御息女の覚信尼様その他二三の同行がおられたのみと思われる。そのような御臨末に聖人は「われなくも法は尽きまじ和歌の浦のあおくさびとのあらむかぎりは」の御辞世を残されたと承る。秀吉は臨終を前にして焦燥苦慮、一子秀頼のことが案ぜられて「秀頼をたのみ申して候、たのみ申して候」と枕頭に侍する家康等の家臣に哀願愁訴している。聖人の御臨床の悠々逼らぬ御姿、それは絶対の未来の光につながつている。果して何れが幸福であるかと。——私は学生達に斯う言い放つたのであつた。

池山先生についてお話すると、先生は相手を離れて凝つと見つめ又瞑目される、恰も涅槃の境に遊ぶようであつた。蓮華谷の周辺は静寂そのもの、先生に対していると寂けさが身に滲み入る境地であつた。その境地から仰せられる御言葉は「唯仏与仏の言葉」とでも申すか、絶対のいのちの言葉に遭うことであつた。今こゝに先生の霊前に先生と皆で、こうしておあいしている、不主思議である。伊予の国から遙々来会された学生諸君、どうぞ御参会の所詮がありますよう、私は念ずる次第である。

西元先生は例のにこやかさをたゝえる顔から、斯う話された。

仏になつて居られる池山先生をたゞ讃仰するだけでは実は先生は御悦びにならないのではないか。先生はきつと仏

様の御徳を讃えることを喜んで下さるに違いない。

私は、だから、敢えていう。「池山でも助かる、況んや西元においておや」と。　私は、御縁があつて各宗の寺院にお話に参る。高野山大学にはずつと前から参つて居ります。或る時、大学の学生が、阿弥陀如来とは如何なるお方かと問うた、私は、阿弥陀仏の原籍は御浄土、現住所は此処である、と答えた。学生は、それでは先生は？　答、私も同じ、と。学生曰、では先生は阿弥陀仏と同じか？　答、然り。学生曰く、然らば先生は仏か？　曰く、私は凡夫である、と。こんな話をやりとりしたことがありますが親鸞聖人といい、池山先生といい、私の親爺である、他人の前では自分の親に「様」付けする程、水臭くないものである。そういうように思う。　その学生は宿に訪ねてきて浄土真宗の教えをきゝたいと言いました、私は、君達は真言の教えで行詰つたならば、浄土の教えを聞きに来なさい、と答えたことでありました。　斯ういうような私の態度と申しますか、不遜のような私の態度の奥には何か池山先生から教えられたものが仂いていると思つている。

先生についてもう一つ、それは先生には、歎異抄の真の読み方を根本的に教えられたことであります。

次いで、東先生はこう話されました。

石田さんが横におられるが、古い昔からの法友である。この頃、この会が懐かしくなつてきた。老いたりとでもいうのだろうか、若い松山の学生さん達をみると、今も写真で見たように、その頃は念仏で走り廻つていたのでした。現在、本来の学問の研究に入つてやつていると、曽ての日に池山先生に遭い、ひいては先生を通じて聖人におあいしたことは私にとつて大きなことであつた、とつくづく思う。学生の時に先生に遭うたことが、それが活きてきて加速度的に年と共に私に躍動してくる。

今日の一日は、一年に一度の、一番好い日である。私は多忙な身だが、この日だけはあけておくのです。家内と一緒に、今日こそは、とやつてくるのです。

昔の人々と会えると共に、新しい人々と会えるのが嬉しい。七百年の昔と今日とは時代は隔てゝいても精神的の世界では同じです。松本さんが学生諸君を抱いて指しているその松本氏が指しているよりも大きなものがそうさせているのです。

先月十六日にNHKの〃時の人〃に出たが、その後、沢山の手紙を貰つた、その中に昔の親鸞会の旭義祐君の手紙がありました。彼は今は故安藤正純氏のあとを継いで安藤姓をなのり浅草のその御寺にいられるとのことであるが、石川県の寺の子供で、学生時代には私などに寺院が厭だと

常に云つていたのでした。その義祐君が手紙を寄こした。テレビをみて、私の声を聞いて、泣いたり、笑つたりだつたと感激を伝えてきました。義祐君の子達は父のその泣いたり笑つたりの姿をみて、大笑いした、とも書いてありました。私は旭君とは池山先生の御葬式以来のことです。あれ以来、一度も会いも交通もしていないのです。これが一つの世界に住んでいることです。現在私のやつている研究はノーベル賞級の研究だと張切つてやつていますが、その世界とは、別の世界があるのです。学生の頃ボロボロの服で先生をお訪ねすると、先生は「東君ならこの格好でいゝよ」と、巻帯のまゝ出てこられたあの先生の境地にいつ辿れるのか、人間として、先生のような人間になりたい。それは大それたことだ、がそんなことを思つている私であります。

＝東さんは一ヶ月も前から一道会の期日の決定を確かめに私に電話で督促された、その次にまた来会者の様子を問合せられた、多忙な学会や諸々の会合の間を縫つて一道会の一日を空けておきたいとやりくりしているのが私にはぐつと響いてきていた、――この日の会が終つて東さんはまた一寸した会合があつてこゝを出られたが大急ぎにすませて夜になつて又やつてこられたが、その時は古旧の方々は帰られてしまつて、去年のように松本さんも帰つてしまつていなかつた、だが夜おそく迄、先生の御写真の前で、泊つた二三人の同行と打ち興じて談りつゞけられた。この日一日有りつたけをひたりきつていたくてたまらない姿が私に滲みこんできたことを、こゝに駄言ながら附記します。＝

次いで井上善右衛門先生は、こう話された。

私は池山先生には一番御縁が少なかつた一人である。学生時代に故野間豊景学友と共に、数回先生の御縁にあうだけである。毎年この会で一人々々のおいのちをきいていると、はつきりしてくることが一つある。私は本願寺などにも呼ばれて参ることがあるが、宗門の現実にふれると何か心おだやかならぬものがある、心が騒いでくる、あわてゝくるような気持になる、仏教が現代に生命を失うていることを思わせられる、これに出会うと、あわてるというか心がざわめく。

私は法隆寺の故佐伯両貌下に教えをうけたが、この両師の仏教の坐りは私と違つたものをもたれているようである。曰く『いや／＼、百年か二百年すれば仏法は耀やく、雲は晴れる』と仰つしやる。人間の造つた宗団には興亡があるが仏法は不滅である、両貌下には、この坐りがあられた。私はあはてを覚える駄眠をむさぼつた報いとでもいう

のかと恥じる。仏法は不滅であるのか、私はこの一道会に参集してここに気付くのである。最近友と仏教を現代に如何に生かすべきかについてよく話合うことだが、その手段方法、会合の繁盛など、それは我々の手の届くこと、然し仏法は法が人に於いてその真実を顕現する。池山先生という、生きたもの、動かないものが、人を通じて動く、法が人を通じて仂く、それより外にないと思う。仏教を現実的に生かす方法、それは外側から触れる問題である。最後は生きて消えぬもの、この一道会のようなものでなければならぬ。私は、よき師にあい法に生きた姿にあい、いつとはなしに胸にしみ込ませて頂いた。今後の仏法のありかたは其所に心を新らたにして眼を開くにあると思う。今日の学校教育は科学的視野に於いてより外にない、これでは人間さ歪みがでてくる、考え方や物の見方がメカニズムで教育にれ合理主義の人間しかできない、それは無理からぬことだが、然し人間を人間たらしめてゆくには、それでよいのであろうか。マルクスは宗教は人間を麻痺さすというが、人間的視野を失いメカニズムによる人間教育は、科学はアヘンなりと云い得るのではないか。それらを思うとき、仏法は人間のために、人間の心に窓を新らたに開く人類に対して大使命を持つのではないか。

それは生きた人を通じての御念仏の仂きより外にはない。私等はそのようなものに触れさせて頂いた、その因縁は不思議である、たゞ与えられたものの中に育てられたのであつた。これをいよいよ深く感銘させられるのである。

次に中井玄英先生は次のように談られた。

秋が深くなると毎年一道会を想い浮かべるのです。私はそれの来るのを楽しみにしています。昨年も家妻と一緒に参会したが今年も二人して参りました。池山先生に引かれて呼びだされる、大いなるうながしという、先生は大きな力が今もあります。私はたつた一年間先生の教えを受けただけであるが、井上先生の言われたように、池山先生と云う人を通じての仂き、導きを深く感じます。

先生は常に「親鸞においては、とあるのを、池山においては、と置き換えて云々」と言われ、「好き人法然上人とあるのを、好き人親鸞聖人の仰せを蒙つて……」とおつしやられたときくが、私は「中井におきては、唯念仏して弥陀に助けられ参らすべしと、好き人池山先生の仰せを蒙つて信ずる外に別の仔細はなきなり」となつて居ります。

聖人は御本典の信巻に「信に復(また)二種あり、一には道ありと信ず、二には得道の人を信ず」と涅槃経を引いて仰せになつている。私は、得道の人を信ぜねばならない、聖人の仰せをうけて池山先生を思うたびに、そう思うのです。

教団が組織作りをやるが、作られる中の人、法の灯がどうであろうか、伝導者自身の中に法があれば自然に組織できることであります。この一道会に集まられた人々は池山先生の中の法によつて集まつて来るのであり、有難いことであります。

次で西川さんの述懐があつた。私は禅の道を永く修したが行詰り、甲斐和里子先生の御縁で「自照」誌を開き、白井成允先生の「真実道」を拝読して異様な心の響きを親えた、先生の「歎異抄領解」を続いて拝読し私の進むべき道が開けてくることを知つた、時々花田先生の御縁にあい、その因縁でこの会に参会させて頂いた。私をよくここまで育てゝ下さつた、よく引きずつてきて下さつたと大いなる御方の前に、池山先生もその大いなるお方の一人で何とも云えぬ思いである、今日の会座は池山先生の還相のお言葉と拝聴した、と述べられた。

もう夕方になつて屋外も薄暗の気配となつてきたのでこれで一応会を終ることにして夕食とすることになる。帰路につく人々や、久渇を医して見合せて顔をほころばせる組がいつものように、あちこちにできる、緊張のあとの安らかなざわめきが悦びの声となつてひゞく、法乳に腹ふくれた子供達が、親の膝下で腹ばいになつたり逆とんぼをやつたりする風情である、こゝがもし御浄土としたなら、清風宝樹を吹くときは、五つの音声出しつゝ、宮商和して自然なり、清浄勲を礼すべし、という風光であろうか。夜の闇が濃くなる、闇に包まれて帰路につく人々の姿が本門と裏門に消えてゆく、そして残つた人々、特に京大学生等二三人その他の人々に、白井先生の坐談が遅くまで続けられるのであつた。

昭和三十八年十二月二日。

頌春偶感

業風吹いて止まざれども
唯だ聞く弥陀招喚の声
声は西方より来りて
身を繞り髄に徹る
慶ばしい哉、身娑婆に在りつつも
既に浄土に光耀を被る
あわれあわれ十万の同胞
皆同じく声を聞いて倶に一処に会せん
南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

甲辰正月　於洛西　聞光庵

成允合掌

畏れを除く

〈北米〉　北条恵実

阿弥陀仏は光期で我々を摂取したもう。清浄光で貪欲を、歓喜光で瞋恚を、智恵光で愚痴をおさめたまうのである

釈尊は「凡夫というものは恐れを持つものである」と説かれた。その恐れというのは、活命畏、悪名畏、怯衆畏、命終畏、悪趣畏の五つであるこれら五つの恐怖をもつて不安の中に日を送つているのが我々の日常生活である。

第一の活命畏とは、政治や経済についての不安や、自分の健康についての恐怖である。世の中が進むにつれて、我々の生活も複雑になり、多忙になり、焦燥と不安の中に毎日を送り迎えしている。戦前はこんなに忙しくなかつたように思うのだが、これは単に年齢の加減ばかりではないと思われる。

航空機の急速な発達によつて世界がせばめられ、今までは全く縁のない外国の問題だつたことが、米国内に直ちに影響し、その政治や政策が、又直ちに我々の家庭に響いてくる。アフリカや極東に起つた独立問題や内訌問題が数ケ月を待たずに税金や、徴兵の形で我々の家庭にまで波及してくるのだ。

随つて政治とか経済の問題は、昔ほど我々の生活から縁遠いものではなく、我々の個々の問題については、はつきりと分らぬながらも、直接我が身にかかつてくるのだから本能的に、それに対して漠然たる不安と恐怖を持つにいたるのである。

その上時間から時間へのアメリカの生活は、我々の生活を愈々目まぐるしいものにする。米国の凡ての生活基準は自動車の発達によつて規定されると私は思う。自動車とその道路の発達と完備に随つて、距離は愈々縮められ、その短縮された距離と、そこから生じる時間は仕事の量に鞭よせられ、その仕事の重量から来る負担が、毎日追われているような焦燥感になると思う。

戦后この方、日本ブームといつて、日本風が喜ばれ、建築にも、庭園にも、日本風がとりいれられ「わび」とか「さび」とか「しぶさ」という言葉がそのまま文章にあらわれて、文化人の口にものぼり、又そうした静寂の文化を生み出す母体となつた東洋思想、特に仏教の教が多数のア

メリカ人の心を引きつけるというのは、一つには追いつめられた目まぐるしい現実社会への反動的心理のあらわれであると見てよいのではなかろうか。

かくして我々自身の現実生活を静かにながめる時、政治と経済の重圧の中に、風の中にそよぐ葦の如き存在たる自分を見出し、その存在の基本となる我が身の健康に対する不安が生れるのである。

ところで釈尊は我々の経済生活、即ち財産の不安定な事を『大経』の中で

「この世の人々は身分の高い人も低い人も、富者も貧者も、男も女も老人も若者も、皆銭財のことばかり心配しているが、この銭財はあつてもなくても、どちらにしても心配ごとは絶えぬものだ」

と説き、又別に、

「この世の財産には王難、水難、火難、盗難、自然消滅、低利不還、悪子濫費、怨家、等の八つの難がある」

と教えられている。

実際我々の生活をかえりみると、釈尊の仰せの如く、金を求め財を追うて血眼になつている、そらタキス（税金）そらストライキ、そらユニオン（組合）、そら所得倍増などと、まことにあわただしいことである。

「世の中は金と女が仇なり。どうぞ仇に巡り合いたい」

の狂歌の通り、全く仇打の日暮しではないか。ところが世の中はこれでよいと満足する時がない。あればあるで心配、無ければないで苦労がある。

大体財産そのものが不安定なものではないか。釈尊の申される八難ー法律国憲その他戦争等の不時の勃発事などによる不可抗力、水害、火災、盗難その他自然消耗や極道息子の濫費、株の暴落、無理金儲けをした人の恨みなどと、全くこの世の財産はあてにならぬものである。といつてこれをなくしては生活できぬ世の中の仕組になつているのだから、これを無視しては一日一時でも生きて行けないのである。そこで「仇けど仇けどわがくらし楽にならざりじつと手をみる」といつた啄木の生々しい慨嘆も出てくるのだ。

よそから見ればアメリカの今の生活は、まるで極楽か天国のようだという。なるほど外出するには自家用車を下駄同様に使つているし、家に入れば冷暖房装置もととのい、湯水も自由、冷蔵庫、洗濯機、掃除機、テレビ等も一通りは揃つているが、果してそれで我々自身は心もゆつたりと安泰、満足な気持で暮しているであろうか。

心中をのぞいて見れば全くその反対だといつてよいのではないか。新築の家、ピカピカの自動車、その他の機具類は大経の中の仏語

「一つあればまた一つを欠く。それらを皆揃えたいと思う。たまたま揃うたと思つたら今度は次々と古くなり、失くなつてゆく」

とある通りで、順々に家の修理と自動車や機具類の補足と保険とタキスに追いまくられ、外からは極楽か天国のように見える生活もひとたび中に入つて見れば全く火の車が廻つていて地獄相を呈しているのだ。ここに経済生活の畏れがあるので、自身の生活をふりかえる時、誠に思いなかばに過ぎるものがあるではないか。こうした中にこそいよいよ「火中の蓮華」たる仏を、聴聞して、しつかり身に頂かねばならない。

□

釈尊は人間の幸福の一つとして健康を教えていられるが本当にその通りだと思う。若い時は生気発剌としているからさほどにも感じなかつた健康ということが、初老、中老を過ぎる頃から、成程、健康第一ということがうなずかれてくる。在米一世の方々の平均年齢は七十歳位だろうか、現在活動している方々は、若い苦難の開拓時代を突破した素晴しい健康に恵まれた、まことに多幸な方々である。だが寄る年波には勝てず、七十歳を越す年齢ともなれば、矢張り健康についての悩みや不安はのがれられぬ。私の家の洗面所キャビネットでもさうだが、動物性、植物性のビタミン、頭痛薬、風邪薬、腹薬、目薬などと、下手なドラッグストアのように大中小の薬瓶が林立しており、暫くたつと夫々幾粒づつかの薬をのこしたまま、どれが何の薬だつたか忘れてしまつて、半年に一度ぐらいの割で、妻が薬瓶を整理して捨てているようである。勿体ないことだが間違つた薬を飲んでトラブルを起すよりましだと思つている。

薬の外にマッサージとか電気療法とか、よく効くという話を聞けば千里を遠しとせずに治療を受けに走るし、野菜汁が良いと聞くとしぼる機械を百金を惜しまずに買い求める。それもよいことである。

ところが外傷はいうに及ばず、内臓の病気までが、祈祷や信心だけで治るという話を真にうけて、何の批判もなくそれに走りこむというのは、どうしても納得がいかない。

人間は強いようで弱く賢そうで案外愚かなものである。スペース時代を現出した人間の智能はおそろしいほど進んだものであるが、その一面、信仰と祈祷の名をかりて、病気が治つたり金がもうかつたりするというとんでもない迷信に、何の抵抗もなく引きずりこまれるおそろしい一面があるのである。

人間の本能からくる盲点、それは金と色と健康に対する強い欲望と、それに附随する不安である。この盲点にとけこむのがいわゆる新興宗教である。勿論病気は気から、と

いうから、或る種の病気は、ある程度まで精神転換によつて好転することもあろう。

だが病気を治し金もうけが出来るということだけを一枚看板とし、それだけを目的としての神だのみや仏だのみは、まさしく大迷信であり、大いに排除すべきものであることは断言してはばからぬところだ。

社会生活が深刻になるにつれて、健康への不安と恐怖も深まり、迷信の横道へそれてゆきがちであるが、そうした畏れと迷いを明らかに照らして「生けらば念仏申さなん、死なば浄土に帰りなん」毅然たる心構えをあたえたまうのが、阿弥陀仏から恵まれる信心の智恵である。ここに始めて人間の畏れが自然に除かれるのだ。

□

人生の五つの不安、畏怖の第二番目は、悪名畏で、人々が自分の悪口をいつておらぬだろうかという心配である。第三番目は、怯衆畏といつて矢張り世間の目と口に対する恐れで、この二つは大体同種の不安だといつてよかろう。

近頃私は住宅の裏庭に集る雀二十羽ほどに、固くなつた食パンや残飯の干飯を、朝夕二回やつている。やり始めて三ヶ月程になるので大分馴れてきて、中でも勇敢なのは私の足もと五尺の所まで下りてくるようになつた。数年前おとずれたロンドンのバッキンガム宮殿前の大公園の雀が、人の手から餌をついばむのを思い出して、始めたことで、こちらには何の害心もなく、早く私の手から餌を食つてくれるようにと願つているのだが仲々そう簡単になつてくれない。私が家の中にはいり他に浸害者もいないのを見極めるとパッパッと廿羽が入れ替り立ち替り羽ばたきしながら舞いおりてきて餌をついばんでいる。だがその間いつもピョンピョンと跳びあるき、頭を左右に廻転して浸害者の近よることをおそれているようである。そして一寸した音にも驚いてパッと飛び立つ。私はこの様子を可憐とも、あわれとも思いながらいつも見ている。雀のあの驚きの中に人間の、そして私自身の不安の姿を見るからである。家の二匹の猫は雀をねらつている。これが雀には一番恐ろしい風に見える。だがその雀を追う猫も私の叱る大声に驚いてこれまた背を丸くして逃げる。ところがその猫を叱る人間は、これまた五つの畏れの中に大揺れにゆれているのだ。何故人間はそんなに動揺するのであろうか。

世の中で幽霊が怖いというが、考えて見ると、それは人間自身が闇の中に作りだした幻覚であつて、そんなものより人を騙す、白昼大手を振つて歩いている生きた人間の方がよつぽど恐ろしいことに気がついてくる。これが悪名畏であり怯衆畏である。かくて人間はいつも世間の目と口が恐ろしいのである。世間全体が束になつて自分にのしかかり、口を極めて罵つているように思えて、心の安まる時がなく、いつもおびえているのだ。『大経』に「心のために走使せられて安き時あることなし」とあるのがそれである。

三十三年前、私が京都に遊学した時「都会は生馬の目でも抜く所だ。気をつけよ」と云い聞かされて、上洛後しばらくその気持が抜けなかつた。近頃日本に行く時には、大抵「日本のスリの良い鴨になるそうだ、注意しなさい。何分アメリカぼけしているんだから……」と云い聞かされて行く。があまり盗られたという話は聞かない。そんな先入観念で油断なく目をギョロつかせていると、かえつて向うからこちらをスリとあやしむかも知れない。

かくて周囲を見て恐ろしいと思つていたのが、やがて仏様の御智恵によつて照らされてくると、他人以上に恐ろしいものは、一番手近な自分の心だと気づかれてくる。月がなくのも、花が笑うのも皆自分の心のさせる業で、世間を恐いと見る目は、実はわが心の醜悪を表白しているのだ。

こころこそ　心をだますこころなり
ゆめ心には、こころゆるすな

□

我々人間の本能的な恐れの中に、悪名畏や怯衆畏があつて、世間の目と口を恐れ、自分が悪口を云われていないかとの不安が絶えずつきまとうていることは前述した。

我々が何時も拝読している『十二礼讃』の中に、竜樹大士は阿弥陀仏をたたえて「その行は象歩の如し」と、象は陸路は勿論、急流の河にあつても、ドッシリと足を地底につけてあゆみ、進んで行く。兎は河水を表面だけ泳いで渡り、鹿は水中に或る時は泳ぎ、或時は歩いて行くが、象だけは何時も河底に足をつけて渡るとお経にも説かれている。凡て波乱万丈の苦難の人生に処して、しつかりと足を地につけて歩めとの御教誡である。

私はいつもこの「象歩」の教を想い、そのようにありたいと願いながら、自分の現実生活の心の足跡は、右に左に大きく乱れ、足もとの浮いていることを悲しく思うことである。五つの不安の嵐は、時に私を吹きとばすまでに苛責なく荒れ廻り、私は足腰立たぬまでになつて、意気地なく不安と焦燥の泥の中をはいずり廻ることがある。そんな時私は親鸞聖人のお声を身近かに聞く。

無明長夜の灯炬なり　智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり　罪障重しとなげかざれ

何の取柄もなく、罪業の塊で地獄一定でしかない私は、このお慈悲一つがあつてこそ始めて生かされて行くのだ。

さて先述の如く、人間は最初に幽霊をおそれる。幽霊とははつきりした形のないものをいうので、自分の頭で理解

出来ない一切のものを神と幽霊に帰する。ここに恐ろしい迷信が生れてくるのだ。

次に人間は目に見えぬ形の無いものよりは、生きた人間を恐れるようになり、自他を守るために規律を作つた、それが道徳であろう。だがここでは自分のいたらないのを反省する前に他を責め、自分の務めは果さずにおいて他に向つて容赦のない批判を加える。

かくて道徳の狭い道がどつちを向いても動きのとれない袋小路に追いこまれた時、ここに今までの目がグルリと一廻転するのである。いやさせられるのである。他を見ていた目が自分にかえつてくる。外を見ていた目が内にひらかれてくる、他を恐れ、世間を畏れた心が、その自分自身をおそれるのである。

善導大師はここを二河白道の譬えをもつてとかれて「三定死」――行くも死せん、かえるも死せん、とどまるもまた死せん――と表白され、親鸞聖人は「地獄は一定」と告白せられたのである。

自分の真実の正体を知らず、これを棚上げしておいて、他をのみ責め恨み、呪い、憎み、ねたみ、そして恐れている醜い心――このド根性こそ地獄真向の私の本当の姿なのだ。そのド根性を仏はかねてしろし召されて、それを救わんとして大悲をそそぎにそそがれていたとは、何という不思議な広大無辺の大悲心であろうか。ここに気づかしていただくとき、悪名畏、怯衆畏がそのまま念仏相続のよろこびに転ぜられるのである。

□

第四の命終畏と第五の悪趣畏は、この世の無常とわが身の罪業についての畏れである。人間に限らず一切の動物生物は皆自分の生命の長からんことを願つている。空に舞い上る小鳥も、水にくぐる魚も、皆いのちを惜しんでいる。

だがこうした生きたい願望を持ちながら、一切の生物は死に、また枯れていかねばならぬので。ここに死に対する底知れぬ畏れがあるのだ。若い元気な時には、生命は無限にあるように思つてあまり畏れもしないが、若さと健康が奪われていく前、命終畏と悪趣畏に直面させられる。

大文豪のトルストイは、その著『わが懺悔』の中で、

「それはあたかも一隻のボートに乗せられて、自分にも分らぬ或る岸から、対岸の方向を示された櫂を渡されて、一人ぼつちで突き出されたようなものであつた。中流に出ると流れも強くなりボートが流されそうになり、又流されている航海者もあつた。或者は流れと戦つて進み、或者は流れに随つて進む。その行列を見ている間に私は指定された航路を忘れた。私はすつかり出発した方向を忘れ流されて、ゐる周囲にしたがつた。私は遠くに流され

た。私の死なねばならぬ急流のうなりが聞えるまでに流された。そしてすでに私にはその急流の中で壊されたボートが見えるのである。私が我にかえつたのはその時である」

と告白している。

何と悲痛にして深刻な叫びであろうか。この厳粛な死の事実の前に立つて、始めて人間は真実にかえる。

「死を忘れる者は贅沢となる。贅沢はこうじて大胆となる。大胆は道義を蹂躙して跋扈する」

とは夏目漱石の『虞美人草』の中の名言である。

かくて肉体的な死の恐怖は、更に進んで精神的な、悪趣畏の反省となる。『大経』には「大命まさに終らんとして悔懼交々至る」と出ているとおり、いよいよ死の厳頭に立つた時、始めて自分の心の本当の姿が見えてくるのだ。

明日もある明後日もある。来年もあると行方を延ばしている間は、自分の心を誤間かし続けているのだが、善導大師のとかれた二河白道の譬の中の、火の河、水の河に行く方を断たれ、悪獣、群賊に追いつめられた、所謂『行くも死せん、かえるも、とどまるも死せん』の三定死に立つてこそ、始めての機の真実と法の真実を知らされるのだ。

ここに到つて、命終畏と悪趣畏の二大恐怖は波転されて光明の広海に浮ぶ、歓喜と平安の不可思議の光明の世界がひらけてくるのである。

ケーベル先生

和辻哲郎

日本人の欧洲文化の摂取の態度が全面的に問題であつた。根を移そうとせずに、ただ人目を驚かすような花だけを切りとつて来ようとする。その結果は、その花を携えた人がひどく尊敬せられたというだけで、その花を咲かすような植物は我が国には育つて来ないのである。そうゆう対度で当時の学者や秀才たちは、騒々しく、仰々しく、大きい身振りをもつてヨーロッパの智識を振り廻していた。その気取りや衒いが、ケーベル先生にはまことに鼻もちのならないものに感ぜられたのであろう。そこで先生は、花をすて根を移すことを、ちみに物静かに努力せられた。

老年

島崎藤村

老年は私が達したいと思う理想境だ。今さら私は若くなりたいなぞと望まない。どうかして、ほんとうに年をとりたいものだと思う。

十人の九人までは、年をとらないでしおれてしまう。その中の一人だけが僅かに真の老年に達し得るかと思う。

聞欠断片

花田正夫

業繋

過去のなしわざによつてその人の生活がしばられて行くことを業繋という。

ゲエテの大作の詩『ファースト』に、主人公の前に悪魔が黒犬となつて現れ、種々と問答する場面がある。主人公がやがて疲れて「早く出て行け」と犬に命じる。すると

「帰れと仰言つても、そう容易には出られません。入口の扉を開けて下さらねば」と云う。

「この窓も開いてるじゃないか、自由に飛び出せ」

と再び命じると

「旦那は御存じないが、悪魔は何をするのも自由気儘だと云うものではありません。悪魔には悪魔のおきてがあつて、出て行くには、必ず入つた戸口からでないと許されないのです」

と答えている。

吾々もよく省みると、過去の行為によつて、よかれあしかれしばられていることに驚ろかされる。卑近な例でも、日曜講話の時など、何時の間にか集る人々の坐が自然に定まつてしまう。最初何処かに坐を占めると、そこに坐らないと落着かないものが出来る。

常観先生のお言葉に「善人は善という金の鎖でしばられ、悪人は悪という鉄の鎖でしばられる。いずれにしてもしばられて身動きが出来ずに苦しまなければならぬ。」とあるが、成る程とうなずかされる。

解脱

善悪の凡夫をともに憐念せられる仏の御心には、業繋にしばられていて、そのことに気付かず、ただわれよしの我執我慢をつのつて、ののしり、わめき、あらそうて、そのはてを知らぬ我等がいかにいたましく思召されることか！

親鸞聖人は御和讃に、解脱の二字に左假名をふられて

「げだつというは、さとりをひらき、ほとけになるをいう。われらのあくごう、ぼんのうを、あみだのおんひかりにてくだくというこころなり」

とおしえて下さる。このおひかりがなければ、ただ自業自

縛の暗黒の中に悶死のほかはない。

倶会一処

阿弥陀経に、真実の信者のめぐみとして、倶に一処に会す、とある。

一度愛別の嵐にあうと「別離久長にして、更に相会うこと無き者」にとつてはまたとない大徳音である。

さて、「会う」ということは一体どういうことであろうか。私の岡山の学生時代「死の勝利」という小説を読んだ。そこでは相愛し合うた二人が結婚して公園のベンチに並んで坐つている。然し、同じ花を同じベンチで、同じ時に眺めていても、二人の心は所詮別々で、一つになる時はない、ということを詳細に書いてあつた。

してみれば真に会うということは、心と心とが一つにとろけることで、その人と境界を同じくすることである。然し境遇が異なり、性格が夫々に違う者がどうして真に会うことが出来ようか。そこにその可能の道はたつたひとつ、大小、清濁さまざまの河水も、そのまま大海にそそぐとき一味に転じる。老少善悪を問わず、本願の大海に帰するとき、そこに一味のひかりがさして来る。

私が京都の学生時代、念仏の友、白井寅男さんが来て何かと談合したとき

「あんたとこうして仲良くしているが、何かのことでけんかをするかも知れぬが、どんなに争つても、念仏の世界からは出られない……」

といつたことが今なお耳の底に刻まれている。

さてそれでは、念仏者同志は相会うが、その外は駄目なのか、というと、そういうせまいことではない。本願を仰いで念仏申すところ、段々と種々な人々の心も理解されてあんなひどい人と思つていた人々も、自分も同じ人間ではないかと省みさせられ、一切の衆生の恩というものが浮んで来る。そこに目蓮尊者が別れた母と相会してよろこぶというよろこびも恵まれて来る。自分が生かされることによつて一切が生きてくる、そういう微妙なひかりをほのかに知らされるところ「倶会一処」の妙味もおのずからうなずかされる。

究竟依

筑紫野春草

倶会一処の悲願にもえて先達らいやつつましく清く生きましき
朝の散歩どこをどう行つてもよい筈にコース定まるいつかおのずと

あとがき

「春乾坤にめぐりて来て」と昔からよろこぶことでありますが、この春、例年のように思い出されますのが

桃源いずれのところにかある
西峯もつとも深きところ
漁人に問うをもちいず
溪にそい花を踏んで去れ

という王陽明の詩であります。儒家の理想境を桃源と名づけてありますが、そこに到達するには、桃源境から流れて来る花をたよつて溪流にそつて行けば自然に到達出来るということで、これをそのままに、浄土を求める人に、念仏をたよつて行けば自然に浄界に帰ると教えられる思いがするのであります。相対の分別の智恵しかない者に、絶対の境界ははかり知ることが出来ません。我々は唯々、絶対の境界から流出する念仏の大悲に導かれるばかりであります。

ほととぎす　聞くや心をからにして

□

近角先生の御講話も「欲生心」のところに参りました。縦横無尽に身読して下さつた先生の一語々々、くりかえし御味読下さい。

「畏れを除く」の北条師の一篇は、北米サンジヨセの仏教会で活動して下さる師の所感であります。同教会発行の開光誌から頂きました。御住所は

REV. E, HOJO。Buddhist church.
644 N. 5th. St.
SAN JOSE 12 CALIFORNIA
U. S. A.

「一道会の記」はこれで終りました。今秋の集いには皆様のお声とお顔に接したいものと念じて居ります。榊原老師の御苦労を謝して居ります。

池山先生の名号碑の建立のことも予定通り調順に進んでおります。篤く御礼申上げます。

聚墨生

御案内

毎月第一、二、三日曜、午后一時半。一道会例会。市電新郊通り一丁目下車、東へ一丁半。名鉄、呼続下車。国鉄、笠寺駅下車。

毎月廿四日、午前・午後。法話会。昭和区小桜町、教西寺。市電、御器所通り下車。桜花学園東側。

定価一部　二十五円（送共）
半年　百五十円（送共）
一年　三百円（送共）
名古屋市南区駅上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駅上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光　第十六巻　第二号　昭和三十九年三月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可